American ROCK LYRIC LANDSCAPE

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケイプ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル
イラストレイション=花井祐介

第19回

ジョン・プライン「サム・ストーン」

戦争から帰還した兵士の悲惨

John Prine
"John Prine"
Atlantic◆SD8296［1971］
⇨同◎19156-2

ジョン・プラインは60年代のシカゴのフォーク・シーンから出てきたシンガー・ソングライターだ。彼のレコードは『ビルボード』のトップ10に入ったことはないが、91年に〈コンテンポラリー・フォーク〉というジャンルでグラミー賞を獲得。音楽評論家やミュージシャンなど、専門家からの評価は高い。46年生まれで、今も現役だ。

この'Sam Stone'が収録されたアルバム"John Prine"が発売されたのは71年。この頃はアメリカ人にとって、戦争はごく身近な近い存在だった。僕はといえば高校生で、先輩たちの何人かは徴兵で軍に入り、なかには一番危ない陸軍を逃れるために、海軍や空軍に自分から入っていく人もいた。そんななか、戦争の恐ろしさを一番感じさせたのは、ヴェトナムから帰ってきた兵士たちだった。

僕は立川にある米軍キャンプに住んでいて、そのキャンプの西側には家族用の民家が建ち並び、東側にはヴェトナム帰りの兵士たちが治療に来る大きな病院があった。敷地内の映画館に行くと、車椅子に乗った戦争帰りの兵士も来ていた。切断や火傷を負った兵士ばかりだ。僕たちティーンエイジャーとあまり年齢が変わらない兵士何人かと知り合い、一緒に遊んだこともあった。

彼らはヴェトナムのジャングルから抜け出すことができたラッキーな奴らだった。しかし中毒になっていた兵士も多かった。ひどい怪我の痛みを抑えるために、医者からもらったモルヒネと、イリーガルだが手に入りやすいヘロインを使っていたからだ。その上にヴェトナム戦争の恐ろしい思い出を消すために、自ら注射器でドラッグを打っていた兵士も多かった。当時のアメリカ社会は戦争反対の空気が強く、兵士を悪く思う人も多かった。兵士たちもヴェトナムでの戦いを恥だと思ったのか、辛かったのか、鬱病になったり、もう一度中毒になってしまった兵士も少なくなかった。この問題は当時のアメリカに大きな影響を与えた。

まずは〈サム・ストーン〉という名前の説明から始めよう。〈サム〉はアメリカの軍隊で人を募集するポスターでよく使われるキャラクター〈アンクル・サム〉を連想させる。そのおじさんはアメリカ国旗の帽子をかぶり、白髪のヒゲ面で'I want you for the U.S. Army'といっている。ケンタッキー・フライド・チキンのカーネル・サンダースより、ちょっと若くて恐い感じだ。

そのアンクル・サムという名前は、フライング・バリット・ブラザーズの「マイ・アンクル」にも使われている。この曲はアンクルから徴兵の手紙が来たからカナダに逃げようという歌だ。アメリカ人ならアンクルといえばアンクル・サムを連想するし、それは擬人化したアメリカのことだ。また、ステッペン・ウルフには「ドント・ステップ・オン・ザ・グラス・サム」という曲があるが、これはサム=アメリカの国はマリワナに手を出すなという歌だ。ちなみにストーンという名前も、ドラッグをやっている人を'He stoned'ということに由来していると思う。

Sam Stone came home
To his wife and family
After serving in the conflict overseas
And the time that he served
Had shattered all his nerves
And left a little shrapnel in his knee

〝サム・ストーンは海外の戦いでサーヴしてから、奥さんと家族のもとへ戻ってきた〟。歌詞の'serving'や'served'は'service'のことで、米国のために働くことを指す。アメリカにサーヴィスするといえば、アメリカのために役立つという意味だ。英語ではよく'serve your country'という。'conflict'は、ここでは長く続く戦争のことを指している。この曲はヴェトナム戦争当時に出されているから、この〝海外〟とはヴェトナムのことだろう。そこでサーヴした（尽くした）時間は、'shattered all his nerves'=彼の神経をボロボロにしてしまったという。その上に彼の膝には小さな'shrapnel'を残してしまった。シュラプネルとは砲弾のかけら。そもそもこの言葉は砲弾を発明したヘンリー・シュラプネルの名前に由来している。

But the morphine eased the pain
And the grass grew round his brain
And gave him all the confidence he lacked
With a Purple Heart and a monkey on his back

〝しかしモルヒネは彼の痛みを取ってくれた〟。病院では痛みを抑えるためにモルヒネをよく使う。アヘンから作るドラッグで、中毒性がある。戦争で傷を負って帰ってきた軍人は、そのために病院でアヘン中毒になってしまったといわれるほどだ。

〝彼の脳の回りには、草が生えてきた〟＝もちろんこの〝草〟とはマリファナのことだ。〝モルヒネとマリファナは、彼に自信を与えてくれた。彼は〈パープル・ハート〉を持ち、背中にはサルが乗っている〟。この'purple heart'とは戦争で負傷した兵士に与えられる米軍の勲章：名誉戦傷章のことだ。紫のリボンとアメリカの初代大統領：ジョージ・ワシントンの柄が入っているハート型のものだ。'monkey on his back'とはスラングで、中毒のことを指す。この言葉は他の使い方があり、例えば借金を払えないときやギャンブルをやめられな

●ジョージ・カックル／GEORGE COCKLE　ラジオ・パーソナリティ。1956年、鎌倉生まれ。

©George Cockle / Record Collectors

いといった、がんじがらめになっている状態の時に使ったりもする。

chorus: There's a hole in daddy's arm
where all the money goes
Jesus Christ died for nothin' I suppose
Little pitchers have big ears
Don't stop to count the years
Sweet songs never last too long on
broken radios
Mmm...

直訳すると〝お父さんの腕にはお金がどんどん入ってしまう穴がある〟だが、これは注射器でモルヒネを打っていることを表現している。モルヒネを打つにも金がかかるからだ。聖書では〝イエス・キリストはあなたの罪のために死んだ〟とされているが、ここではキリストは意味もなく死んだのではないかといっている。世界は何も変わらない、いったい何のためにキリストが死んだのかと歌っている。'Little pitchers have big ears'＝これを直訳すると〝小さいピッチャーには大きな耳がある〟となるが、アメリカ英語では〝小さい子供たちは親の姿をよく見ている〟となる。この詩の'pitcher'は野球のピッチャーではなく、小さい花瓶に付いた大きなハンドルのことを指している。英語では大きなハンドルのことを'ears'（耳）という。

※イラスト後送

'Don't stop to count the years'は、年を数えるために止まってはいけない、つまり、そんな時間はないということだ。〝甘い曲は壊れたラジオでは長く残らない〟。きっとこれは、彼の体は壊れたラジオのようでもういい音は流れてこない、もうこれからいいことはない、という意味だろう。

Sam Stone's welcome home
Didn't last too long
He went to work when he'd spent his
last dime
And Sammy took to stealing
When he got that empty feeling
For a hundred dollar habit without
overtime
And the gold rolled through his veins
Like a thousand railroad trains,
And eased his mind in the hours that
he chose,

©George Cockle / Record Collectors

While the kids ran around wearin'
other peoples' clothes

〝サムがアメリカに帰ってきた頃は歓迎してくれたが、そんなムードはもう残っていない〟。英語では'overstayed his welcome'という言葉がある。最初はウェルカムだけど、あまり長くいると邪魔になってしまう、という意味だ。'last dime'は金がなくなったという意味。〝金がなくなった彼は仕事に行った。モルヒネがなくなると空虚な気持ちになる彼は、100ドルもかかるモルヒネ代のために盗みをはじめた。1000台の列車が彼の血管の中を走っているかのように、彼の腕の中には金が転がっていた〟。この場合の〝金〟も、モルヒネ代のことだ。彼が選んだ時間、つまりモルヒネを打つ時間は、心が楽になった。そして子供たちは、人からもらった服を着て走り回っていた。家にはもう子供の洋服を買う金はない。もう彼は子供の面倒をみれないんだ。

repeat chorus: Sam Stone was alone
When he popped his last balloon
Climbing walls while sitting in a chair
Well, he played his last request
While the room smelled just like death
With an overdose hovering in the air
But life had lost its fun
And there was nothing to be done
But trade his house that he bought
on the G.I. Bill
For a flag draped casket on a local
heroes' hill

〝サムは最後の風船を割ってしまった時、一人ぼっちだった〟。この〝風船が割れる〟には死んだという意味があるが、ほかにも表現していることがある。麻薬をコンドームに入れて持ち運ぶ運び屋のこと、モルヒネやヘロインなどが小さい風船に入って売られていたことなどで、全体的に麻薬のイメージを膨らませていると想像できる。

〝彼は壁を登っていた〟＝中毒の人はドラッグが切れたとき、壁を登ると表現する。詩には座ったままとあるから、相当な中毒だろう。〝彼が最後のリクエストをかけた。部屋は死の匂いがした〟。中毒者は体を洗わなくなったり、肌からドラッグの匂いが出てくるから臭くなる。その上に、オーヴァードースの空気がヘリコプターみたいに空気の中に浮いていた。'Death is in the air'という言葉がある。死神が近づいている、最期が待っているということだ。〝もう人生に楽しさはなく、もうできることは何もない。〈G・I・ビル〉で買った家を自分の棺桶と交換するしかなかった〟。'G.I. Bill'とは軍人のために大学や家の資金を安く貸してくれるアメリカの軍隊用のシステムだ。軍人の墓のことをアメリカでは〝ヒーローの丘〟というが、彼はそこに入るしかなかった。皆、埋める前にはアメリカの旗を棺桶の上にかけてくれるんだ。その旗は奥さんや親戚に渡される。映画でよく見かけるだろう？

ジョン・プラインは一時期、陸軍に入隊していたので、戦争の歌を書いたのだろう。この曲でヴェトナム戦争とは一度も歌っていないが、この曲が発売された頃はちょうどヴェトナム戦争が終わりかけていた。一見、遠い過去を歌っているようだが、アメリカはまた戦争をしてしいる。皮肉にも、この話はまたもやアメリカ人の近いところにあるのかもしれない。

SAM STONE Words by John E. Prine Music by John E. Prine
©Copyright by WALDEN MUSIC INC. All rights reserved. Used by permission.
Print rights for Japan administered by YAMAHA MUSIC PUBLISHING, INC. 日本音楽著作権協会（出）許諾第○○-101号